

## 別室登校の中学生に対する教示要求行動形成のための支援

### - 自発性の増大を課題とする一事例への応用行動分析学的介入 -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
小寺 悠代

不登校児童・生徒への支援において、新たな登校の形として別室登校が認められつつある。しかし、その設定を活かした積極的支援の報告はまだあまり行われていない。本研究は、自発性に課題を持つと判断された別室登校の中学生に対して、理科の学習場面における自発的な教示要求行動を形成することを目的とした。

介入は3つのフェーズから構成された。アセスメントにおいて、対象生徒Aは口頭よりも書字による要求の方が容易であると判断された。そのため、介入1では解答できなかった問題「学習記録シート」と呼ばれる記録用紙に記入し研究者に見せるという、伝達のモードを口頭ではなく書字により行う教示要求行動の形成を行った。介入2では学習記録シートの使用を維持させたままで、支援手続きをより構造的に改良した。これは支援者からのプロンプトが過剰にならないための配慮であった。介入3においては、それまでのフェーズよりも支援者ではなく教員に質問に行くことをめざし、行動開始のきっかけを研究者によるプロンプトではなく「時間」に設定し、決められた時間が来たら行動を起こすようにするなど、研究者のフェードアウトを試みた。

その結果、全てのフェーズを通して継続的に教示要求行動が見られた。介入1では、最初は研究者のプロンプトを必要としたものの、セッションを重ねるごとにプロンプト回数は減少した。介入2においては、最初の数セッションは介入1から継続して書字による教示要求行動が見られていた。しかし、学習教材や学習手続きの変更に伴い、口頭や指差しによる教示要求行動が見られるようになった。このことは口頭や指差しにモードが変化したことで、研究者からのプロンプトや状況に応じて適当と思われるモードを生徒Aが選択できた結果と言える。介入3においては、最初のセッションではプロンプト回数が増加したが、その後徐々に減少していった。これは「時間」という新しい枠組みが生徒Aに理解されていったことを示していると考えられる。また、教示要求以外の行動において生徒Aが自発的に教師に働きかける場面が見られ、生徒Aの自発性の高まりが認められた。

本研究の結果から、教示要求行動が形成され、またそれ以外の面でも自発性が高まったことが示唆された。また、別室を積極的支援の場として活用できる可能性や、学生ボランティアにも実行可能な支援形態の一例も示されたと考えられる。しかしAについては教示要求行動を成立させるにはまだプロンプトを必要としており、自発性という点において課題が残った。また、他の教科への教示要求行動の般化、書字による伝達書式の改良、本研究の結果の他の教員への周知など、生徒Aの今後の活動可能性を広げるための継続的支援が必要であると考えられる。